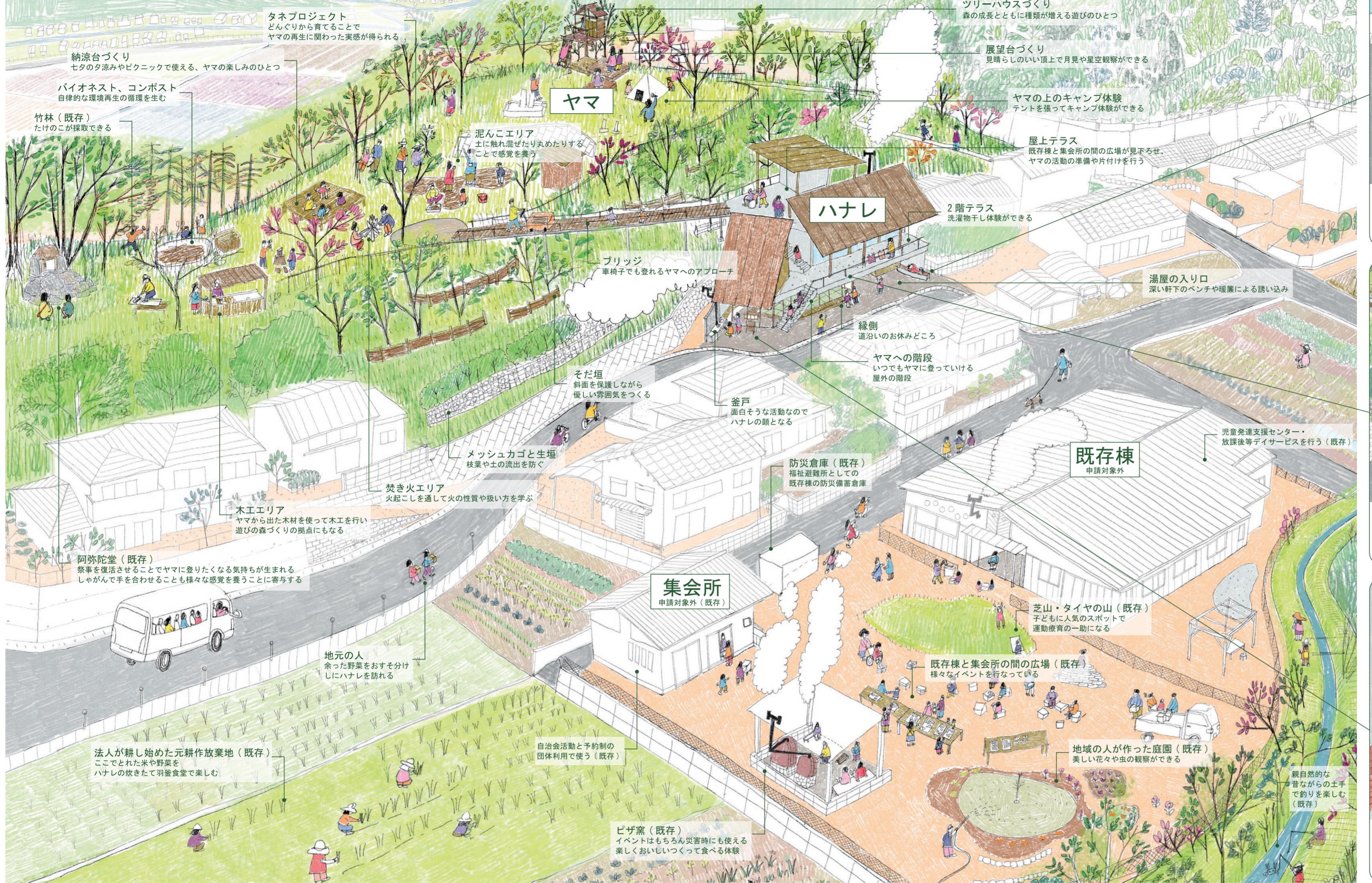


みんなのハナレー療育に役立つ遊びの森と薪の湯屋付き

みんなのハナレは、子どもの成長を支える支援とヤマの再生を通じた自主防災活動を、世代を超えた全ての地域住民が行う拠点です。



1. 厳しい環境にある子どもたち

高知県の人口は県庁所在地の高知市に一極集中している。障害福祉サービス事業所も同様で、都市部と中山間地域で大きな差が生じている。ショートステイについては、県全体の事業所数は増加しているものの中山間地域は増えておらず、町村単位では事業所がないところがほとんどである。県全体のショートステイ利用日数と実人数は増加しており、令和6年度の障害児・者の1ヶ月平均は1,753日 247人程度であった。しかし、県実施の当事者調査で7人に1人が利用できる施設が少ないと回答している。特に、強度行動障害や不登校の児童が利用できる場所が限られている。このような状況の中、県は「日本一の健康長寿県構想」を策定し、障害特性等に応じた切れ目のないサービスの提供体制の整備に向けて、家族のレスパイト、緊急時の対応等の受け皿の確保に取り組んでいる。(高知県子ども・福祉政策部障害福祉課)

2. 自然災害と高齢化による環境の荒廃と自主防災活動の発足

ハナレに隣接したヤマには、地域住民が祀ってきた小さな阿弥陀堂があるが、住民の高齢化や過疎化によって祭事ができなくなり、ヤマ全体が荒地になって土砂災害のリスクが生じている。昨年度、長山田地区が日高村の自主防災モデル地区に指定されたことを機に自主防災活動が再開された。ハナレは、大規模災害発生時に地域住民を受け入れる自主防災活動の拠点となる。また、南海トラフ地震発生時には被災地域の後方避難所となり、特に避難所で過ごすことができない発達障害児を受け入れる福祉避難所として機能する。ハナレの中には井戸があり、ライフラインが寸断されても使用できる羽釜や薪風呂を整備して避難所としての機能を強化するとともに、平時より住民が利用することで防災意識を高めることができる。(想定する災害：急傾斜地崩壊、地震や台風によるインフラの寸断、南海トラフ地震)



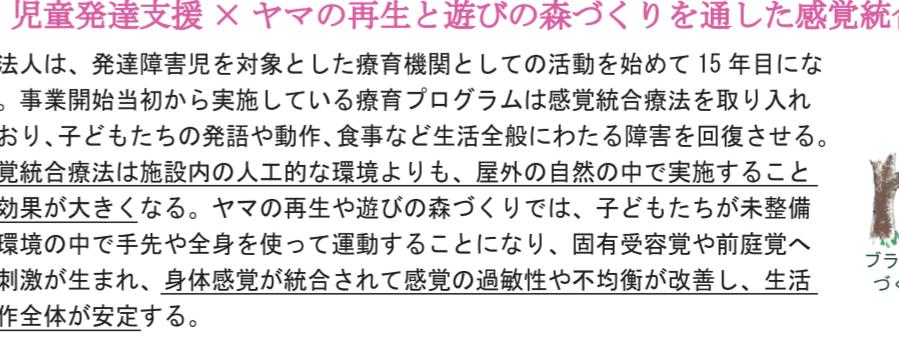
3. 全ての世代が支え合う仕組み

日高村の高齢化は深刻さを増し、15年後には村民の半数近くが65歳以上になる。現在も、配偶者を失くして孤独な生活を送る高齢者が増えており、日常生活だけでなく、近年頻発する大規模災害にも不安を抱えている。そこで、自主防災活動の拠点であるハナレで炊き出し訓練や避難所宿泊体験を行い、高齢者にも参加してもらうことで不安を解消する。またハナレでは発達障害児や不登校児等が自由に過ごし、住民たちによる食や遊びの活動が行われている。様々な世代との交流で高齢者は居場所を見つけることができる。本事業は生きづらさを抱える全ての世代が互いに支え合う仕組みをつくる。



4. 児童ショートステイ×年代の違う住民による子育て支援

高知県内には障害児と親を受け入れる施設が少なく対応できていない。そこで、ハナレでは緊急性が高い親子を受け入れて支援する障害児の単独型ショートステイと宿泊型ペアレントレーニングを実施する。また、被虐待児や不登校児が安心して過ごせる場所をつくり、それまで集会所で行っていた住民活動をハナレで実施する。例えば、移住者による「食と遊び」のイベントにはたくさんの親子が参加する。そこでは、発達障害児をもつ先輩パパ・ママが育児に関する助言を行い、相談相手がいなかった若い親たちに優しく寄り添う。このように、ハナレでは年代の違う住民が集まり、子どもや若い親たちの育児を支援する。



5. 児童発達支援×ヤマの再生と遊びの森づくりを通した感覚統合

当法人は、発達障害児を対象とした療育機関としての活動を始めて15年目になる。事業開始当初から実施している療育プログラムは感覚統合法を取り入れており、子どもたちの発語や動作、食事など生活全般にわたる障害を回復させる。感覚統合法は施設内的人工的な環境よりも、屋外の自然の中で実施することで効果が大きくなる。ヤマの再生や遊びの森づくりでは、子どもたちが未整備の環境の中で手元や全身を使って運動することになり、固有受容覚や前庭覚への刺激が生まれ、身体感覚が統合されて感覚の過敏性や不均衡が改善し、生活動作全体が安定する。

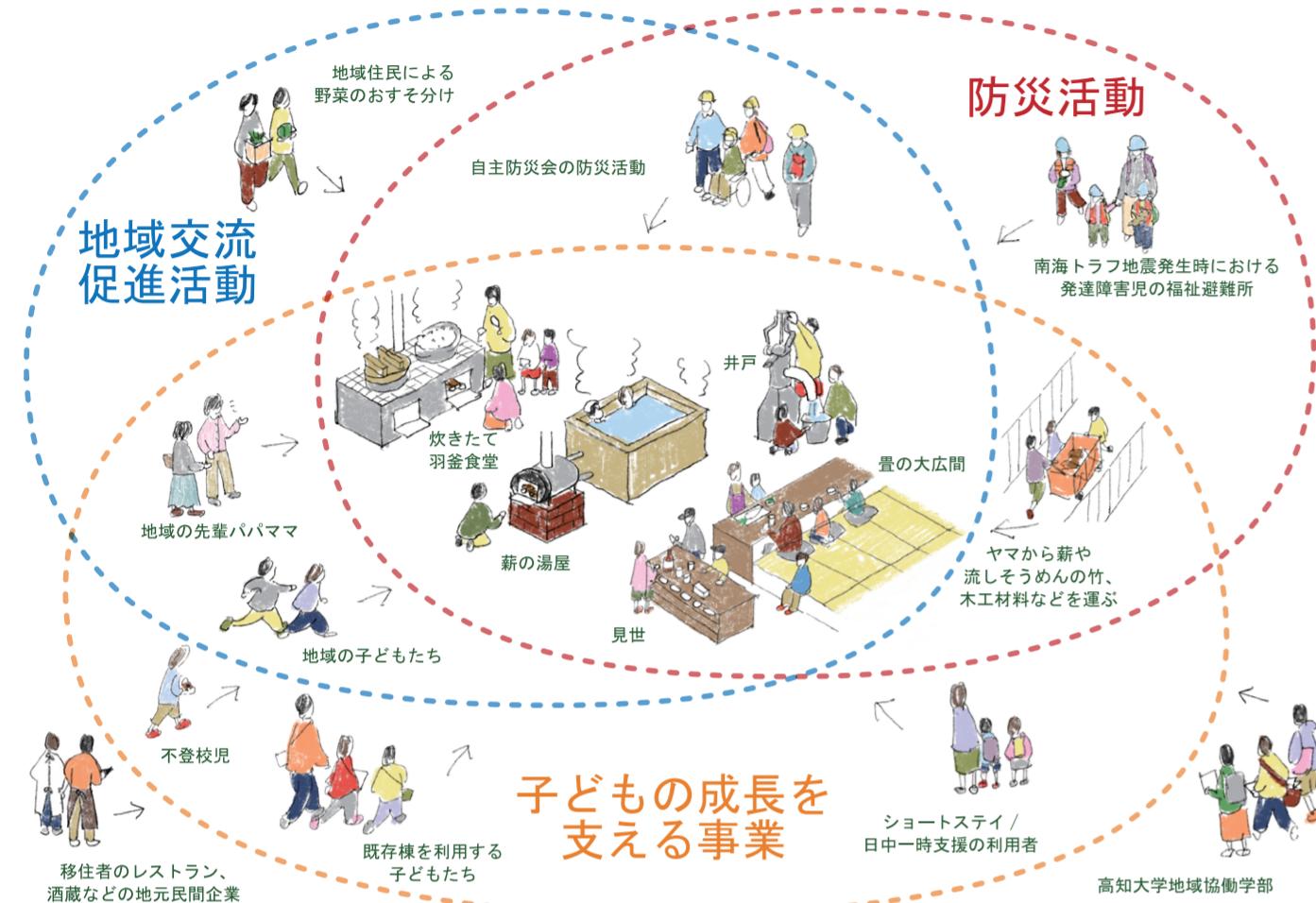


7-1. 炊きたて羽釜食堂と薪の湯屋

ハナレは福祉避難所である既存棟を補完しつつ、隣接する集会所も含めて100名程度を収容可能な避難所として活用できる地域の主防災の拠点となることを想定している。既存棟の備蓄を補完するものとして薪利用の釜戸、風呂釜、薪ストーブに加えて敷地内にあった井戸を再生し井戸水を備える。それらは炊きたて羽釜食堂や薪の湯屋として開放することで自家製野菜等を使った炊き出しや練等、災害発生を想定しながら地域住民に日常的に利用してもらい、発災時にスムーズに避難所運営ができる体制をつくる。シヨウトステイの宿泊機能を活かした避難所宿泊体験の提供も行う。こうしたプログラムづくりと場所や設備の共有によってこれまで別々に行われていた「子どもの成長を支える事業」「防災活動」「地域交流促進活動」が重なり合う場所が生まれる。また各活動を近くの集落活動センターーや高知大学地域協働学部の学生、こども支援ネットなどの団体と連携して行うことで活動内容の拡充をはかる。

7-2. 叠の大広間

これまで活発に行われてきた地域交流促進活動。特にみんなで一緒に食べるイベントには多くの人が集まった。普段は1人で食事をしている高齢者の参加も徐々に増え、孤食の解消につながっている。ハナレの活動を機に酒蔵や大型スーパー、移住者が営む新しいレストランなど協力企業が増えている。子どもも子育てママも高齢者も、誰もが楽しめる居酒屋など行くのが楽しみになるプログラムを畳の大広間で開催する。



8. 遊びの森の療育効果

屋内と違いヤマは凸凹の連続で歩くだけで全身運動となる。何度も挑戦し続けられる環境が子どもの感覚を刺激し、発達させる。

ボールプール

タイヤチューブ
スイング

ジャングルジム

屋内の感覚遊び

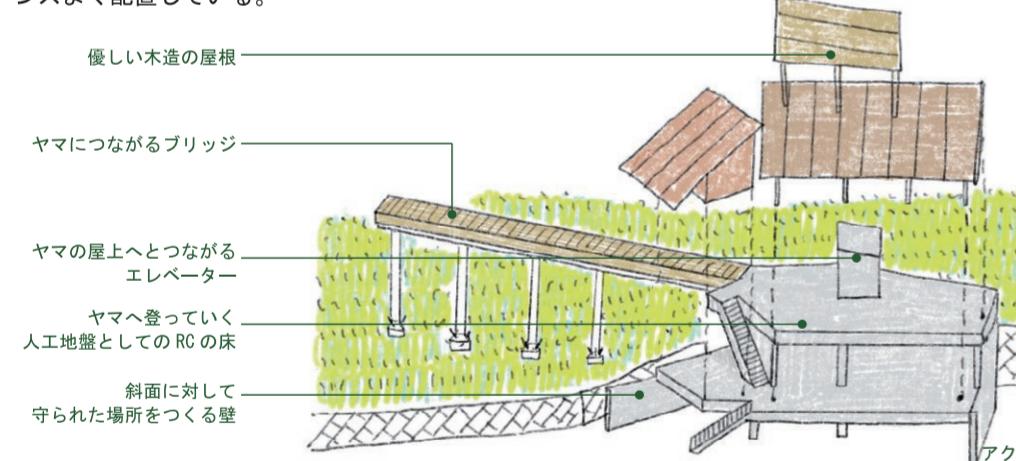


9-1. ヤマの再生プロセス

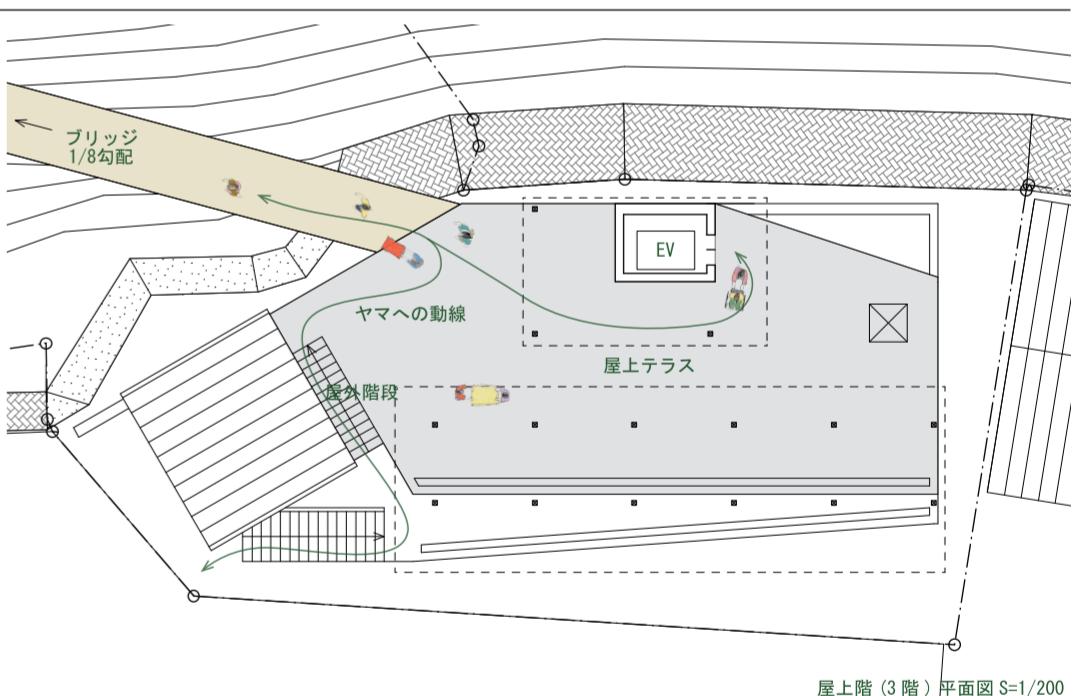
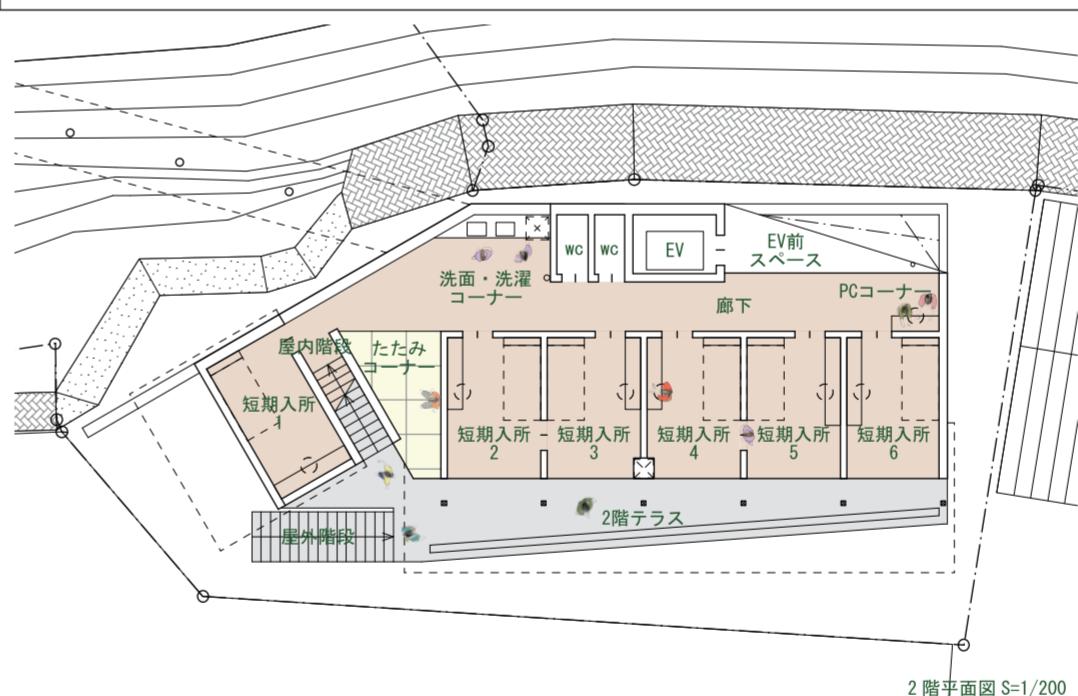
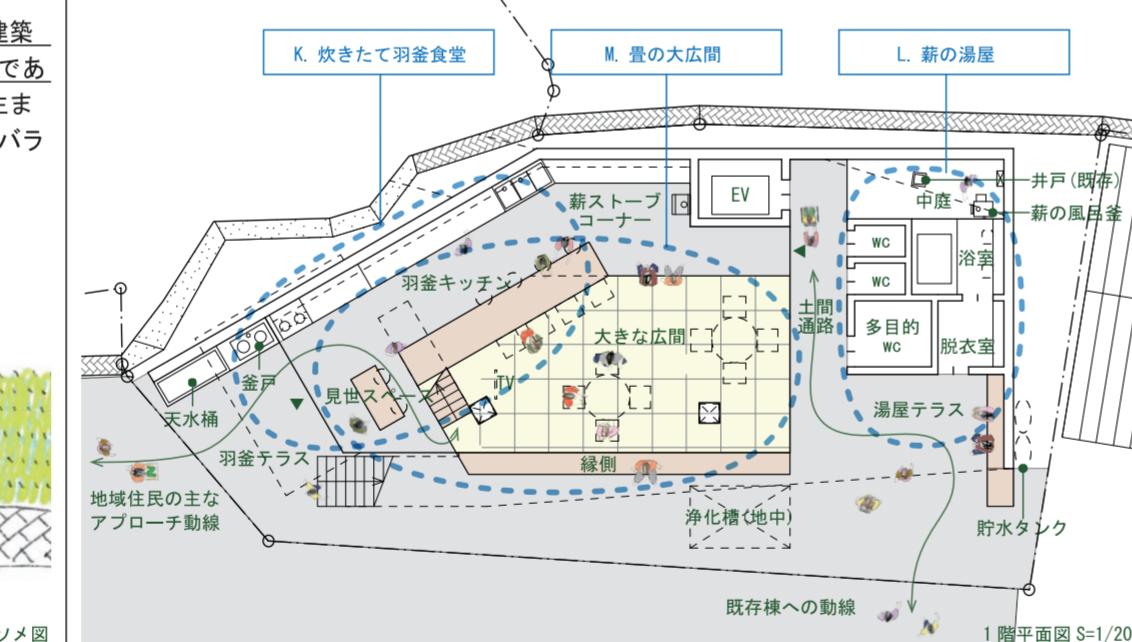
- 法尻はメッシュカゴと生垣により土や枝葉の流出抑制、中腹は「そだ垣」を用いた高木・低木の苗木と竹串にした芝生の林床形成により土砂崩れを防ぐ。
 - 高木苗木は近隣産苗木 1~2m の高木とすることで早期の森林化を目指す。
 - スタッフが中心となり専門家に教わりながら選択除草や剪定、水やりなどを行う。慣れてきたら子どもや高齢者に教えながらみんなで手入れをしていく。

10. ヤマから身を守り、ヤマに登っていくための建築

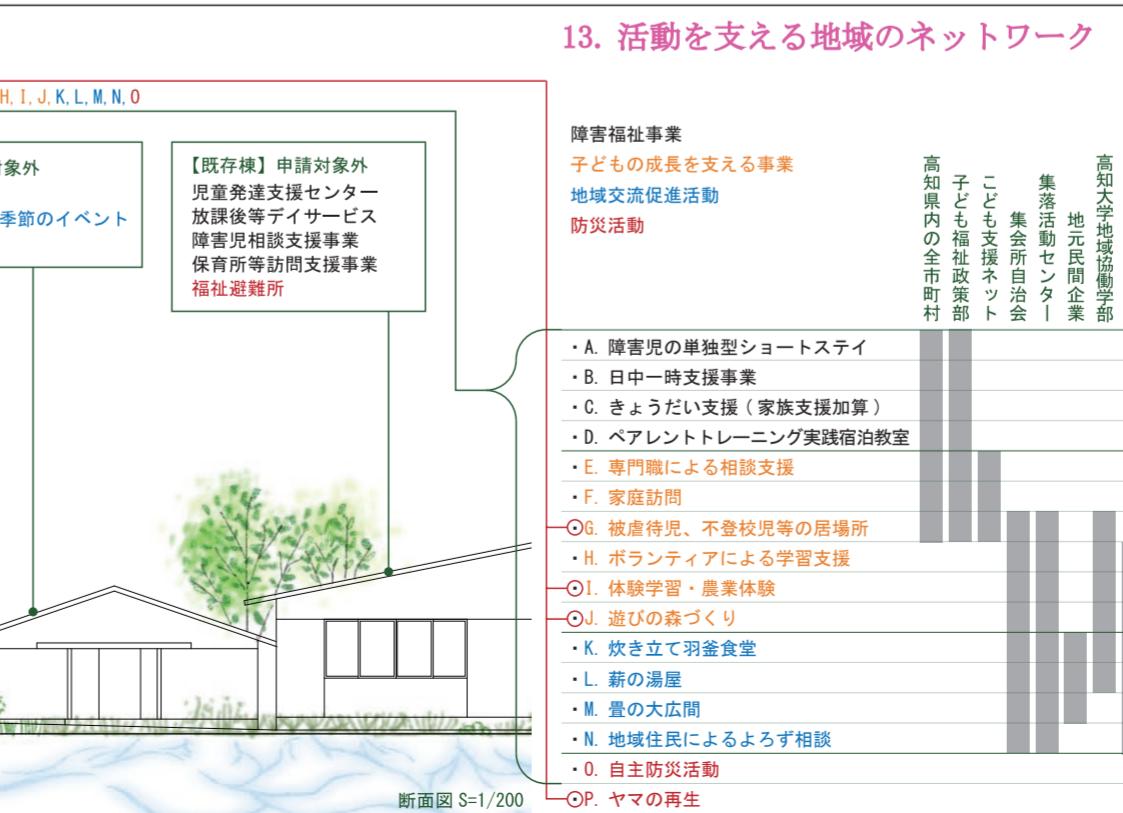
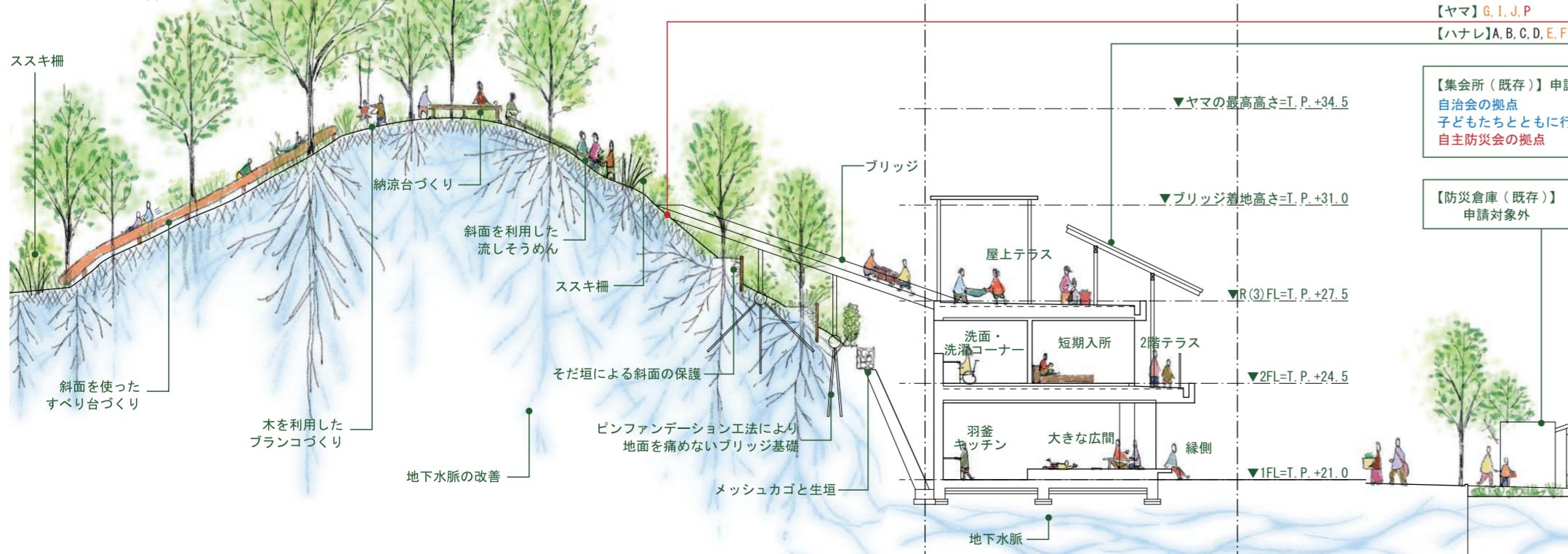
急傾斜崩壊に耐えられるRCの構造によってヤマに登っていくためのステップとなる階段をつくり、その上に木造の屋根をかけ渡すような建築としている。そうすることで頑丈なりながら居場所としての安心感や入りやすい開かれた印象をつくりだす。またRC造による大きな空間を活かして1階は多目的な一室空間となるように縁側や広間、キッチンなどをよく配置している。



11. 使いやすい平面計



12. ヤマと一体となる断面計画



14. 塞現性の高いスケジュール

できるだけ多くの利用者、スタッフ、地域住民のニーズを反映したいと考えており、最終審査の結果通知後にワークショップを行うための期間として基本設計期間を設けることを提案する。ワークショップはハナレの使い勝手に関わるものとヤマの活動に関わるものとの両方を並行して行う。